



「食事が入りにくくなってきた」と、ケアマネージャーから連絡があった山崎さん(仮名)。山崎さんはいわゆる老衰で、前医から引き継いだところから、既に食事が取れなくなり始めていました。

家族に見守られ

家族に説明し、訪問看護なども利用しながら、在宅でのみとの準備を進めました。家族はとも協力的でしたので、食事が進まなくなれば、重湯など口に入るものを作っては対応してくれていました。

いよいよ、という日の朝、「おばあさんの息が弱くなってきた」と家族から電話があり、僕は外来を早めに済ませて、み

ふるかわ まさちか
古川 正愛 24期生、2001年卒



周囲を山に囲まれた加計病院。町の面積の9割を山林が占める

安芸太田町加計病院

【私の勤務地】安芸太田町は「合併の優等生」と言われる広島県で、2町1村が合併してできた。人口は約8000人で、県内最小。高齢化率は約41%で、県平均のほぼ2倍にもなる。町内に2001年にできた温井ダムは、アーチ形ダムとしては、黒部ダムに次いで全国2位の規模を誇る。

入院で得られる安心感

とりに行きました。自宅で静か姿を見ながら、家族と話をして眠りにつく山崎さん。そんな死亡確認をしました。

この一方で、この病院には長期入院の患者さんもいます。寝

たきりで、病状が悪化しても積極的な治療はしにくいのです。それでも、「いつでも医療者がみているという安心感は、何事にも代え難い」と言われます。

「在宅医療へ転換を」。最近の厚生労働省の方針です。今までの社会的入院を減らし、できるだけ在宅に戻ってもらい、介護保険制度でのリハビリテーションやデイサービスなどを利用しながら在宅での生活を送り、最後まで自宅で迎える、という考え方です。

難しい在宅医療

でも、実際に在宅医療をするとなると、簡単にはいきません。介護する家族の協力をはじめ、周囲のサービス提供の状況、地理的アクセスなど乗り越えなくてはならない課題は多くあります。特に、この地域のような急

峻(きゆうしゅん)な中山間地域は、同じ町内でも病院まで三十分以上かかり、高低差もかなりある集落が幾つもあり、難しくなっています。

山崎さんのようなケースはまだ少数です。寝たきりの患者さんを、老老介護のような世帯に、「家でみてください」と言っただけではやはり無理があります。こうした理由で、長期の入院になってしまうのですが、家族・患者さんとも、安心して過ごすことができるという点では、入院して治療する意味があるのではないかと考えます。

僕自身は、診療所勤務を経験していません。診療所と病院で違うのは、やはり、「入院があるか無いか」と思います。「悪くなったら入院すればいい」という安心感だけで、随分、たくさんのお患者さんを外来で診ることもあります。厚労省の方針とは違いますが、この「いつでも入院していいんだよ」という安心感で、今日も外来をしています。